

「雨の車中で」

—二稿—

2025/12/1

〈人物表〉

藤崎 遼一ふざき りょういち

(35)

日系SIer・清和システムズの営業

本庄 雄信ほんじょう ゆうしん

(28)

外資系ITベンダー・アシュトンジャパンの営業

山家 浩二やんべ こうじ

(57)

藤崎の上司

鴻池 吉哉こうのいけ よしや

(60)

タクシー運転手

1. 地方の駅・新幹線ホーム（昼）

車両ドアが開き次々乗客が降りてくる。

その一人、パリッと決めたスーツの男、藤崎遼一（35）が、鞆片手に電話しながら歩いていて、

藤崎「はい、部長。いま新幹線降りました」

2. 東京・清和システムズ本社（昼）

藤崎の上司・山家浩二（57）、デスクに座って藤崎と電話中。腕時計は十二時過ぎ。

山家「コンペまで二時間か。最終準備だな」

3. 駅構内（昼）

藤崎、駅のベンチに座っている。

藤崎「いえ、プレゼンのチェックは新幹線で終わらせました」

手元にはプレゼン資料の束。「株式会社 片山食品 御中 システム構築のご提案」の印字や大量の書き込み、付箋。

藤崎「片山食品さんまで一時間ほどなので、早めに行って社長にご挨拶しておこうかと」

藤崎の脇には土産の菓子袋。

4. 清和システムズ本社（昼）

山家「流石、それでこそ清和の営業マンだ」

と、窓を眺める。視線の先は遠くの大きなオフィスビル。頂上階にはアシュトンジャパンのロゴ。

山家、苦虫を噛み潰した様な顔で、

山家「とにかく、アシュトンの本庄にだけは負けないでくれよ」

藤崎の声「はい、この案件必ずウチが取ります」

5. 駅の上空（昼）

青空は一転し、曇天。ひどい土砂降り。空がゴロゴロと鳴り始める。

6. 駅構内（昼）

構内放送「現在大雨の影響により上下線運行を見合わせております。ご迷惑お掛け……」

運転見合わせの電光掲示板表示。心配する人々の声。

藤崎、ベンチで資料を鞆に閉まいつつ、心配そうに

電光掲示板を見上げる。

そこにボサボサ髪のスーツ男・本庄雄信（28）が

電話片手にのろり登場。

藤崎がベンチから土産袋をどかすと、本庄、軽く会

釈し隣に座る。

本庄「なんか雨なんすけど、何すかこれ」

藤崎、本庄を気にせずさっと立ち去る。

本庄、気の抜けた顔で、肩でため息。

7. 駅・タクシー乗り場（昼）

タクシー乗り場の軒先には長蛇の列。

レインコート姿の係員がメガホンで、

係員「只今上下線運転見合わせの関係で、乗合でのご利用をお願

いしております……」

列の先頭には藤崎。貧乏ゆすり。腕時計は十三時。

と、鴻池吉哉（60）のタクシー到着。

藤崎、安堵。後部座席に乗り込んで、

藤崎「（鴻池に）星見山の方まで」

鴻池、ドアを開け列に向かって、

鴻池「星見山方面行かれる方ー？」

列の最後尾で手が挙がるのを見る。

鴻池「（藤崎に）もう一人、いいですか？」

8. タクシー車内（昼）

本庄、後部座席に乗り込む。

鴻池「とりあえず出しますねー」

と、走り出す。

本庄「いやガチでラッキーした。助かりましたよ」

隣には、藤崎。

藤崎「いえいえ、とんでもないです」

藤崎、タオルで雨水を拭いている。

びしょ濡れの本庄の視線。

藤崎「……よかったら」

と、屈託なくタオルをもう一つ出す。

本庄「いんすか。さーせんね」

と、受け取り、スーツを拭き始める。

雨水が土産袋に飛び、紙袋に染みる。

藤崎、咄嗟に土産袋を鞆で守る。

藤崎「……お仕事ですか？」

本庄「東京から出張で、さっき着いたんです」

藤崎「え、私も東京からです」

本庄「マジすか。え、営業とかすか？」

藤崎「はい」

本庄「俺も営業っす。偶然っすねー」

二人、笑い合う。

本庄、タオルで顔をゴシゴシと拭く。

本庄「雨なんて貧乏くじ引かされました」

藤崎「何でも経験ですよ。お若いんですし」

本庄「（間髪入れず）それ部長とかみんな言うの何なんすかね」

藤崎「こう、自信が付くというか？」

本庄「いいっす。疲れるだけじゃないすか」

藤崎「そ、そうですか」

と、苦笑い。

本庄、髪の毛を拭いている。

藤崎「これも、何かのご縁ですから……」

と、名刺を一枚差し出そうとするが本庄、気付かず、

本庄「あっした」

と、タオルを突き出す。

藤崎「いえ、どういたしまして」

本庄「あ、やっぱもうちょい借ります」

藤崎「え？」

本庄、整髪ジェルを取り出し、チューブから豪快に絞り出して手に伸ばす。

藤崎、ジェルの匂いに顔をしかめる。

本庄、バックミラーを見てボサボサの髪をあつという間にオールバックにまとめ、決まったという顔。

ベトベトの手をタオルで拭き、

本庄「あざっした」

と、差し出す。

藤崎、ややあって苦笑いで、

藤崎「……どういたしまして」

と、呆気に取りられタオルを受け取る。

ふと、オールバックを見て、気づいた顔。

本庄「（鴻池に）あの、一時間あれば着きますか？」

道路は渋滞。

鴻池「ちょっと混んできたので、何ともねえ」

本庄「あー、しょうがないっすよね」

藤崎、本庄の横顔をまじまじと見る。

鴻池「星見山の、どこまで？」

本庄「えっとー」

スマホを確認する本庄、胸元にはアシウトンのロゴ
バッジ。

本庄「片山食品、本社ビルです」

藤崎、あつという顔。

鴻池「なんとか急ぎますけども」

本庄「まあ、いいっす。遅れたら遅れたで。（藤崎に）あ、こっ
ちでいいすか？」

藤崎「……ええ」

本庄「あざっす」

と、一息ついて腕を組み、目を閉じる。

鴻池「（藤崎に）お客さんは、どちらまで」

藤崎「……私も、同じところですよ」

藤崎、渡しそびれた名刺を差し出し、

藤崎「清和システムの藤崎です。アシウトンの本庄さん」

本庄、姿勢そのままに目を開け、

本庄「……ああ、そゆことっすかー」

名刺を胸ポケットにしまい、首で会釈。

再び目を閉じる。雷鳴。

9. 清和システムズ本社（昼）

山家、窓を眺めている。東の空が暗い。

モニタにはアシュトンHPの本庄の写真。オールバックに凛々しい顔立ち。

10. タクシー車内（昼）

赤信号で停車中。

藤崎「この交差点、右に曲がってください」

鴻池「え、同じところ行くんだよね？」

藤崎「いま調べた迂回路です」

と、スマホを差し出す。

鴻池、画面を見て、戸惑う。

藤崎「このまま渋滞ならこっちが早いです」

鴻池「いやー、どうだろなあ」

藤崎「お願いします」

鴻池「これ山の方だしさ、使ったことない道なんだよね」

藤崎「遅れたら困るんです。私は」

本庄、ゆっくり目を開く。

青信号。藤崎、鴻池をじっと見る。

鴻池、否応なしという顔。

渋滞を縫ってタクシーは右へ進む。

本庄「なんすか急に」

藤崎「寝てて大丈夫ですよ」

本庄「え、どうしたんすか？」

藤崎「……驚いただけです」

本庄「え？」

藤崎「本庄さん」

本庄「はい」

藤崎「あなた、本当に本庄さんなんですよね」

本庄「……はい」

藤崎「……片山食品さんの従業員数は？」

本庄、戸惑いつつ、

本庄「……今年4月時点で2,763名」

藤崎「昨年度の売上」

本庄「3,258億円。6割が主力の冷凍レトルト食品、ベーカ

リー部門が2割と飲料1割、残りは新規事業の健康食品」

藤崎「主な経営課題」

本庄「社内システムのレガシー化、データ連携の問題による経営
層の意思決定遅延。昨年機会損失額は300億円以上」

藤崎、本庄と認めて、ため息。

藤崎「その結果、今回のコンペには11社の応募があり書類を通
過したのは」

本庄「2社だけです」

藤崎「……そんなお客様とのご商談に、普通遅れていいわけない
と思うんですが」

と、訝しげな目線。

本庄、ピンと来ておらず、

本庄「……はあ」

タクシー、交差点を直進。

藤崎、咄嗟に気づいて、

藤崎「ちょっと。さっきのところ」

鴻池「え、あ、ごめんね」

と、戸惑いつつカーナビを見る。

藤崎の腕時計、十三時十五分。

藤崎「……次で右行ってくれればいいです」

鴻池「あ、そうかそうか」

藤崎「お願いしますよ。遅れられないんです」

鴻池「ごめんなさいね」

本庄、思わずフツと笑う。

本庄「不可抗力っすよね。そもそも」

藤崎「は？」

本庄、あっけらかんと、

本庄「雨降ったの、誰のせいでもないじゃないすか。遅れたって
片山さんに謝れば済みますよ」

藤崎「何言ってるんですか」

本庄「運ちゃん責めても仕方ないっすよ」

藤崎「仕事をお願いしただけです」

タクシー、次の交差点に差し掛かる。

藤崎、パッと鴻池を見る。

鴻池、分かってるといふ素振り。

右に曲がる。

車通りは少なく、渋滞は無い。

藤崎「あなただって、仕事でしょ」

本庄「仕事はこの後のプレゼンですよ。今はオフっす」

藤崎「じゃあ遅れたら仕事できないでしょ」

本庄「そこ頑張るとこすかねえ？」

藤崎、埒が開かないと言った様子。

本庄「じゃどうすんすか」

藤崎「だからこうやってルート考えてんでしようが。あんたがボ

ケツとしてっから」

本庄「あ、あんたって今ダメな言葉ですよ」

藤崎「本庄さんが」

タクシー、ゆっくり停車するが、二人は気づかない。

信号でもないところ。

藤崎「言わせてもらうけど、人の土産袋に水飛ばして気付かない

方がダメでしょ」

本庄「は？ いや、言ってくれないとそれは」

と、笑う。

藤崎「あとタオルと頭のそれ。こんな密室で使わないでよ」

と、鼻を抑え、窓を開く。

本庄「仕方なくないすか。乗合なんすから。それこそ仕事のため

っすよ」

藤崎「なんでも仕方ないで済むと思うなよ」

突然、クラクションの音が響く。

二人、驚いて鴻池を見る。

鴻池、ハンドルに突っ伏してクラクションを鳴らし

ている。さらに一、二回。

鴻池「……ちよっとごめん。静かにできる？」

(おわり)